

で、氏時の嫡男左近将監氏鑑が当然、守護職を継ぐと見られていた。

しかし、三代將軍足利義満の命令で、氏時の甥式部大輔親世が後継者となった。

大友親世の奥方は大内義弘の妹である。大友家の家督相続に義弘の画策があった。豊前の諸城主は氏鑑に同情し、千葉高胤も大友方に加わった。

豊前の守護職は、大内義弘である。このために義弘の弟大内盛見を将とする大内勢の攻撃を受けた。

戦国時代は、大内氏の持城となり、門司左近将監国親や長岡大炊允実勝らの大内氏の家臣が城番となつて城を守った。

天正十四年（一五八六）、豊臣秀吉が九州平定の軍を九州に派遣、先鋒毛利勢に香春岳城の支城小倉城を落とされて、高橋元種は降伏し、城兵は香春岳に退いた。

豊前各地の諸将も相次いで秀吉軍に下り、人質を出した。

ところが、島津が大軍を率いて北上してくると、元種はこれに呼応し香春岳によって秀吉軍に相対した。

秀吉軍は、十一月七日宇留津城（築上郡椎田町宇留津）を攻め落とし、十一月十五日障子ヶ岳城の攻略に取りかかり攻め落とした。戦国時代の末期のこの時期、障子ヶ岳城は、香春岳城の支城となつていたのである。

香春岳から見えない京都・仲津郡や周防灘の様子を知るため

には、障子ヶ岳城が絶好の場所にあった。

天正十五年（一五八七）障子ヶ岳城は秀吉の宿舎となったと伝えられるが、天正十七年（一五八九）豊前の名城といわれた当城も廃城破却されてしまった。

二 岩隈城 京都郡勝山町岩熊

勝山町役場の北西、約三キロほどの諫山小学校の東に隣接している、標高五〇メートルほどの小高い通称小倉山の頂上が城跡である。

小学校の東、プール脇に、城跡への登り道がある。

山頂は、東西に一二メートル、南北二〇メートル、高さ五メートルほどの楕円形台地で、城台の形をよく残している。特に五メートルほどの切岸は見ごとである。ここが主郭で、城台の西側と東側に高さ五〇メートルほどの土塁が残っている。

主郭の周囲には、幅五メートルほどの腰曲輪（こしりわ）が取り囲み、北側には、高さ一メートルほどの土塁が残っている。

城台の南は、四段の曲輪が



写真4—25 岩隈城の城台

続き、その先はかなりの広さの曲輪が残っている。城跡の北側は墓地となっていて、規模などの詳細は不明である。

築城年代は不明だが、南北朝時代の貞治五年（一三六六）六月に肥後の菊池武光の軍勢が籠もる岩隈城を、北朝方の門司親長の軍勢が攻めている。貞治六年七月、少貳冬資などの北朝方が豊前に攻め入り、香春岳城に立て籠もり、岩石城などを攻め落としたが、菊池武光らに攻められ敗走したとある。『歴代鎮西志』

天文二十年（一五五二）大内義隆が陶晴賢に自刃に迫込まれ、大友晴英（大友宗麟の弟）が大内氏を継いで、大内義長を名乗る。しかし、弘治三年（一五五七）四月三日、大内義長が下関長福寺（功山寺）で毛利元就により切腹させられ、大内氏は滅亡した。

毛利元就は、大内氏の所領を受け継ぎ、中国最大の戦国大名となり北九州進出をはかる。北九州に勢力を振るっていた豊後の大友宗麟と、毛利元就との間に確執が深まる。

毛利元就の北九州進出により、北九州地域の諸城主は毛利元就に従った。

永禄八年（一五六五）、大友宗麟は規矩郡に進出して、長野筑後守の守る長野城を攻め屈服させる。『長野成敗』

これは毛利方にとって重大事件である。これによって、豊前的大半が大友方に占領され、毛利氏の九州進出の橋頭堡の門司

城が脅威にさらされるばかりでなく、香春岳城、古処山城など毛利方との連絡路を断たれることになる。

永禄十一年（一五六八）、毛利方は、宮山城（小倉南区）や岩隈城に兵を置き、大友勢の分断をはかる。

「今度至西大野宮山藝州衆数輩籠之條、去五月廿日取懸之處、軍勲抽之剩一城落去之刻、夜中駆登最前、心懸之次第感悦之至候、同於杉西郷両城累日防戦之段、令二承知候、必追而可令賀與一候、彌忠貞肝要候、恐々謹言」
（増補訂正編年大友史料二二二三）
六月廿八日 親安（花押）

萱嶋美濃守殿

これは、毛利勢が宮山（稗畑山城という…小倉南区山本）に城郭を構え籠城し、長野氏の拠点三ヶ岳城と等覚寺城を分断しようとしたものを、大友宗麟の重臣田原親宏がこれを攻略したとき、萱嶋美濃守に与えた感状である。

この時（六月二十八日）、岩隈城でも合戦が行われている。

岩隈城に毛利方が立て籠もったので、長野助盛（長野三郎左衛門助盛—等覚寺城主）が安東三郎（宝山城主）らとこの城を攻め落としている（三ヶ岳合戦の前哨戦）。

「岩隈城の合戦」に関する史料として

前廿八、京都郡のうち、岩隈村において、敵、立て籠もり候の処、助守、人数をもつて取り懸けられ、宗徒の者数輩討ち捕らるるの由、注進到来し候……（略）……入田丹後入道、城井左馬助、安東三郎に至りても、

岩隈城
2003.12.17調査
2004.11.27
廣崎作図
勝山町岩熊

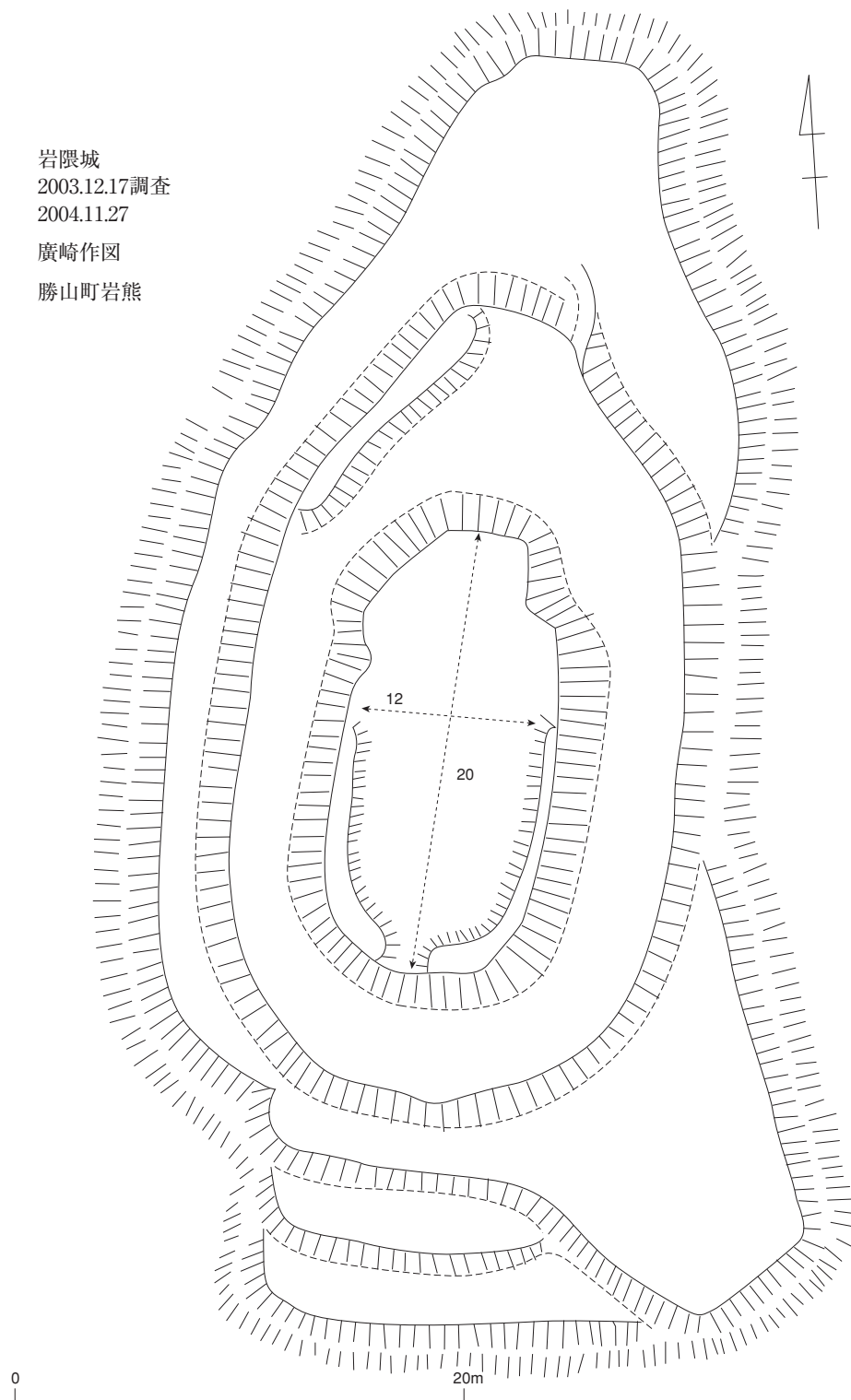


図4—6 岩隈城

状をもつて申し候、倍ますます申し談じられ、堅固の覚悟簡要に候、委細しさいは猶なほ

浦上左京入道が申しべく候、恐々謹言

(永禄十一年)

(大友)

七月三日

宗麟

(花押)

長野三河守殿

『合志文書』

永禄十一年六月二十八日、岩隈城に毛利方が立て籠もったので、長野三河守（長野三郎左衛門助盛―等覚寺城主）が入田丹後入道、城井左馬助（宇都宮長房）、安東三郎らと岩隈城を攻め落としたときの文書である。

同年九月、毛利勢吉川、小早川の両軍五万余が「長野退治」と称して、三ヶ岳城と等覚寺城に襲いかかり陥落させた。

三ヶ岳城は長野兵部少輔弘勝以下、ほとんど全滅状態となった。

等覚寺城の長野三河守助盛は、豊後へ逃げたといわれる。

第三節 勝山町周辺の古城跡

一 馬ヶ岳城 行橋市大谷・京都郡犀川町花熊

行橋市と犀川町との境、今川にかかる天生田橋あもうだばしの南西に、くつついて並ぶ二つ瘤こぶの山が見える。標高二一六メートル、東峰（二の岳）と西峰（一の岳）とに分かれ、豊前の名城といわれた馬ヶ岳城のある山である。

東峰は貫神社ぬきの古い石祠と、五〇センチたらずの不動明王の名像があり、城跡にふさわしい点影となっている。

東西三二メートル、南北一六メートルの広さで二の丸である。

西峰は、南北二七メートル、東西一〇メートルの広さで本丸跡といわれる。中央に、昭和三年建立の「新田氏表忠碑」の大きな石碑がたつ。

馬ヶ岳城は、『豊前古城誌』（熊谷克己編 一九〇三年）などによると、天慶五年（九四二）、清和源氏の祖源経基が築いたという。

その後、大宰府の直轄の城として重きをなし、武藤氏が大宰少式となつてからは武藤（少武）氏の城となった。

貞和年間（一三四五―五〇）西征府將軍宮懷良親王が九州に下向したときに、親王に従った新田上野介義基（新田義貞の一族）が馬ヶ岳城に入城、三代新田氏の居城となり、南朝方の九州における拠点となった。

重要な城だけに戦闘は数知れない。

『応永戦覧』（おうえいせんらん）（天野義重編集―元禄十年（一六九七））には、新田義氏と大内勢との一戦が紹介されている。

応永五年（一三九八）十月、大友氏鑑（おおともしげ）が兵を挙げ、豊前に侵入した。新田上野介義氏は大友方に加わった。豊前の守護職は、大内義弘である。このために大内氏の攻撃を受けることになる。